国際交流余談

随　筆

吉野勝美*

二，三日の出張から帰って見ると，三月中旬の研究室はまるで嵐の後のような静けさである．例年，この時期は修士論文，四年生の卒業研究の追い込み，発表が終わって一段落している時だから閑散とした静けさは当たり前の事であるが，それにしてもこの平成六年の三月はいつもの年と比較にならない．数人の大学院生，教官とのんびりお茶を飲みながらの話しである．

「嵐が去ったみたいだね．」

「そうですね．本当に嵐みたいでしたね．ザキドフさんは．」

まさに桁はずれ，我々日本人から見ると常識を越えていた．これまでずいぶんいろんな外国人が長期，短期の滞在をしたが，久し振りに出会った猛烈人間であった．

平成五年から六年にかけてなぜか特に外国からの訪問客が多く，月に二，三度は研究室で外人に講演をしてもらっていた様な気がする．個人的には手間もかかるし出費も多いから大変ではあるが，私自身にとってだけでなく，学生さん達にとっては学ぶ所がずいぶん多かったに違いないと確信している．

これらの外国教授，研究者に接すれば接する程，日本の常識が通じない事，民族的に，宗教的に全く価値観が異なる事がずいぶんある事を学生さんも身を持って体験した筈である．

名前からして今回のザキドフさん（Prof. Dr. Anvar A. Zakhidov）は旧ソ連の出である事がわかるが，今は独立したウズベク共和国の生まれで，モスクワで物理学を学び現在はタシケントにあるウズベク科学アカデミー熱物理学研究所の世界的にも名の知れた理論屋さんであるが，実験もこなす不思議な人である．

もともと十数年前に米国で開かれた国際会議で会って意気投合したのが最初であり，別れ際にもらったのがきれいな飾り模様のある短刀である．勿論，骨董品か，美術品の様な感じの物だったから問題ないのかも知れないが，どんなにして米国に持ち込んだのか不思議だったし，果たして日本国内に持ち帰る事ができるのか気がかりだったので，その時の事を今でもよく憶えている．“親友になってプレゼントを渡したら，何でもいいからプレゼントを交換するのがソ連流であるからどんな小さなものでもいい，コインでもいいからお返しをくれないか”と云われて，ポケットを探ったのであるが，あいにく五百円も百円十円もない．やっと見付けたのは一円玉一つ．それを“これは水に浮くコインです”と冗談云いながら，恥じ入りながら渡した思い出があるから，最初からおかしな出会いである．

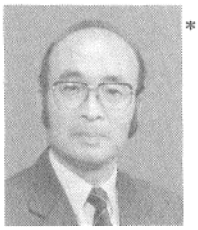
その後，何度か国際会議で顔を合わせた後，文部省か学振の招待で来日し分子科学研究所に長期滞在した後，初めて大阪大学へ来られた時の事も忘れられない．この時は約一月の予定であったが，外人さんに提供できる宿舎がなかなかない．やっと南千里駅前の余り大きくないホテルを予約して，案内する途中で夕食に立ち寄ったこれまた小さな喫茶店である．

「ザキドフさん，豚は食べられなかったね．宗教上」

彼はイスラム教徒である．

「そうです．豚はだめだけど他の肉は大丈夫．」

早速，焼き肉を頼んだが，焼き肉にビールは付



* Katsumi YOSHINO
1941年12月10日生
昭和39年大阪大学工学部電気工学科卒業
現在，大阪大学工学部電子工学科，教授，工学博士，電子工学
TEL 06－879－7757

き物である．ビールも追加．ビールを頼んだのを，直感で理解したザキドフさん，
「私はジュース」
「そうかザキドフさんは宗教上，ビールも飲めないか．残念，気の毒ですね．」
ニカッと笑ったザキドフさんの返答，
「吉野先生，豚も食べれないし，ビールも飲めないけど，奥さんは四人まで大丈夫，ビールと奥さん四人とどっちがいいですか．」
話しはもっと続いたが，以下省略[1]．

彼の最大の好物は羊の肉，特に羊の脂身，じりじり焼けて溶け落ちる脂はたまらないそうである．
「日本にいると羊を食べる機会がないからどんどん力が失せていく．」
とは云っているが，筋肉隆々，丸太棒よりも太い腕は驚異的である．国際会議でも二メートルはありそうな欧米の大男と腕相撲をやっては勝ち続け，私の研究室へ来ても教官，大学院生，四年生の中から合気道四段の尾崎君，阪大正林寺拳法部主将と，副主将で，四段か，三段の桑村君，内山君，剣道部主将で四段の明神君をはじめ何人も挑戦するもみんな負け．少しは腕力は強いはずと自負する私も勿論負け．総ナメにした彼のセリフ，
「日本の教授の中で吉野先生が一番強い．皆んな先生の方が強いんじゃないか，頭だけじゃなく，若い者が力まで負けてはいかんですよ．」
極めてユニークな男なので学生と一緒に面白い冗談，奇談，話題に事欠かない．

尾崎君と一緒に合気道道場へ行って一寸体験した次は剣道部の主将明神君に道場へ案内させ少し教えてもらおうとしたらしいのであるが，“大変でした”と明神君の報告である．
「余りに大きな顔で，横幅の合う面が道場に一つもありませんでした．それに腕も余りに太くて小手がはまらず，結局小手なしでやってました．それに風邪引いたみたいです．」
「剣道で汗をかいて，そのまま寒い畳の上にじっと坐ってたから風邪引いた．」
と本人は弁解していた．
なにせ外人に共通であるが，日本のカルチャーに興味を持つものが多い．是非日本のカルチャーといい接触の機会を与えたいものであるが，余りの環境の変化で風邪なんかをひかせぬ様にはしなければならない．

ともかく旧ソ連と云ってもウズベクは中央アジア．ウズベク人はジンギスカンの流れをくんでいるかも知れないモンゴル系の，体力，知力とも優れた生活力の旺盛な民族のようである．シルクロードのタシケントやブハラと云えば二千年位も前から日本には身近な地域である事がわかる．しかも彼はモスクワで訓練を受けた空手有段者であり俳句も解する[2]マルチタレントでもある．もっともウズベク人が皆んなこんなであるかと云うとそうでもなく，分子科学研究所の丸山教授に聞くところでは，タシケントと同じ研究所に二人のザキドフがいて，彼の方は余りにタフで精力的であるからアニマルザキドフと呼ばれていた，という事である．所が不思議，彼の奥さんは何というか，日本人にそっくりであり，しかもすごい美人，頭もすこぶる良い様である．

こんな大変な人間である上，直接学生の研究の指導もやってもらったから，学生にとっては単に研究の上だけでなく，英会話，更には考え方，物事の処し方を始め極めて学ぶ所が多かった筈であり，学生自身も“なによりも良い経験をした”と云っている．

彼は直感力にも優れて，しかも日本人の心をよく理解していたからだろう，余り良くもない条件に殆ど不平不満を云わなかったが，大分感じる所はあった筈である．とにかく，彼に限らずこれだけの人間を日本で受け入れる態勢が充分に整っていない．条件が悪過ぎ，受け入れたくとも受け入れ難いのが実状であると思う．

国際交流の重要性はいろんな分野で古くから云われており当然の事であるが，昨今はこれが“日本はもっと国際貢献しなければならない”という形になっており，どちらかというと物，金をバラマクという結果になっている．しかし，これでは真の国際貢献ではないと指摘されたりしている様である．学問研究の分野でも全くその通りであるのは周知の所で，むしろ大学関係で云えばバラマク物や金を持ち合わせないだけ条件は悪いだろう．かっては最も多かった国際

交流の形は日本の若い人が外国へ行く，留学するという形であって，彼の国，大学で研究上の貢献をする事も勿論あるが，学ぶ所の方が圧倒的に多かったろうし，また留学したその本人一人が国際感覚を身に付ける事になる．

今云われている国際貢献を我々の分野でやるとすれば，外国からの学者，研究者，学生をもっとどんどん受け入れるのも一つの有効な方法であるのは間違いない．欧米諸国に比べて給料は高い，実験装置も悪くない，一緒に研究をやる学生の質も悪くない．これらの条件は悪くないのだから，もっともっと外国の人が来ても良い筈であるが，残念ながらそれでも日本では一部の所を除いて受け入れられていない．要するに受け入れ体勢ができていない．中でも最大の課題は外人用の宿舎が不足しているという事である．勿論，大阪大学にもあるにはあるが余りに少ない．マンションを借りるにも高く，しかも狭い．それともう一つの問題点は外人研究者に対する保険制度が不備である事である．それも数か月～半年程度の滞在者には難しい問題である．

今回のザキドフさんは約5箇月の滞在であったが，大学で借りられたのは核物理の共同研究員宿舎が約一ケ月のみ．後は私個人としてなんとかするより方法がない．それでも，今度は奥さんと子供さんを本国に残しての単身の来日だったから，少し狭い事は覚悟，承知してもらおうと云う事で不動産屋を私が探し歩いた．すぐに思い当たったのが第一不動産の佐藤さん，息子さんが東大と京大へ行かれていたから大学の教官の事はよくご承知の様で，私はとりわけ親切にしてもらっている．

「先生のためなら仕方がないですね．うちのマンションでよければ，少し狭いですけど少し安いのがありますから入って下さい．もう，敷金はいいですわ．もし出られる時痛んでいたら修繕費だけ下さい．」

確かに狭いが仲々こぎれいである．私の名義で借りて外人さんに支払って貰う事になったのであるが，日本ではたいてい家具付きでない．レンタルは結構高くつくし，結局ベッドから机，何から何まで私が準備して，ともかく狭いのは辛抱してもらう事にして入居してもらったが，帰国後，マンションを返却してから家具類の保管場所にまた悩むに違いない．

保険制度が不充分なのは先に話したが，大学の研究室も狭い．しかし，これは電子工学科では何とか調整できているが，一般的には誰もが悩む筈である．

ともかく受け入れ体勢が悪過ぎる．何とか滞在費が準備できても，受け入れの箱がない，体勢が悪い．しかも外国の場合こんな世話は事務局か秘書がやってくれる．少なくとも私の経験ではそうであった．第一不動産の佐藤さんも云っていた．

「大学の先生，こんな事もするんですか．大変ですね．」

外国の場合，給料も高い事もあってだろうが，秘書はプロであり極めて有能である．秘書なしでは大先生もたちまち行き詰まる．ザキドフさんだけでなく何人かの日本のあちこちを訪問した外国人が云っていた．

「日本の教授は秘書の仕事もしている．秘書も郵便や書類運びやお茶出し以上に，もっともっと能力があるだろうから能力を発揮させてあげたらいいのに．あんな事してたら教授は肝心の仕事をする時間がなくなってしまう．」

もっとも日本の教授は秘書の給料の事も良く知っているから，そうもいかない様である．

彼が最初に来た時から始めている研究の一つは，導電性高分子にフラーレンと呼ばれるC_{60}をドーピングする研究である．1991年に思い付き，基底状態において，或は光励起によって両者の間で電荷移動が生じるという事を予見して研究を始めたのである．理想的には光誘起電荷移動によって光誘起の超伝導や強磁性が実現するかも知れないという夢の様な期待も持ちながら研究を始めた訳である．1992年の初め頃から論文を発表し始めたのであるが，明らかにそれ以後研究を始めている米国のグループが，“先行している我々の研究を正しく引用していない”とザキドフさんは強い調子で不満を云う．1992年夏の国際会議で我々の発表がある事を知ると，本来プログラムには全く別のタイトルが掲載されているにもかかわらず，当日になっ

てタイトルを全く変えて我々に近い内容を発表するという，日本人の常識からは理解しにくいほどの事がやられてびっくりしたのであるが，こんな事は米国では当り前の事かも知れない．

1994年2月は米国で開かれる国際会議に招待されていた．しかし，卒業，入学の業務と重なるものだから躊躇していた所をザキドフさんの，

「直接乗り込んで米国グループと対決しなければいけない．皆んなの前でプライオリティは我々にある事を主張しないといけない．そうしないと彼等は“すべて自分達の発案で自分達がやった”と云いふらす可能性がある．専門家の集まっている前ではっきり主張しておく必要があるから何が何でも行かねばならない．」

と云う言葉につられてついに米国に行くはめになってしまった．

結果としては我々の経過，主張をはっきりと多くの研究者に認識してもらったので，やっぱり行って良かったと思っている．所が日本の仕事に間に合う様に帰国したのは私だけで，彼は更に競合関係にあるグループの本拠に乗り込んで，講演をやり強烈な議論をやった様である．その中で，

「吉野教授は典型的な日本人でマイルド（温和）な性格だから，少し抑え気味に，遠慮しながらしか云わないが，私は日本人ではないからはっきり云う．もっと妥当に公正に発表に際しては我々の論文を引用すべきである．」

と大分やりあった様である．当のグループと私はもともと悪い関係にはなかったが，どうやら西欧人にとっては，人間関係の良し悪しと科学，サイエンスに対するプライオリティの自己主張は全く別のものの様である．さすがに強烈だったと見えて，そのグループの私の若い知人が“吉野教授に謝っておいてくれ”と云ったという彼の言である．

日本人の自己主張，表現が余りうまくないという事もあって，大損している可能性が高い．日本国内に外国人を受け入れる体勢，研究条件，採用条件（給与）の他宿舎，保険等あらゆる面で良い条件を整えて，どんどん優秀な学者，研究者，学生を受け入れ国際化をはかるのが不可欠である．一人の卓越した外国人学者が滞在すれば多数の若い学生，研究者が刺激を受け国際的なセンスを身に付けるかも知れない．若い優秀な博士をとったばかりの外国人学生，いわゆるポスドクなどを受け入れて充分に活躍の機会を与えれば将来，親日的な外国人が増える事にもなるかも知れない．

ザキドフ氏の滞在中もう一つ改めて再認識したのは国際化と共に学際化の重要性である．

ザキドフさんはランダウの弟子アグラノビッチ教授の愛弟子であり，理論屋である．勿論実験もこなすが基本的には理論屋である．我々の実験に対して思いもかけない様な解釈をする，面白い理論を展開する．実験屋と理論屋の結び付きは非常に面白い成果を生み出す．彼は物理屋であり，私は電気屋である．この分野の違いが微妙な感覚の違いをもたらしており，互いに思いもかけなかった様な示唆を与える事が多い．それでも電気屋は物理屋に近いから，どちらも広い意味では物理屋と云う範疇に入るかも知れないが，この物理屋にとって化学屋との共同作業が両者にとってまた極めて効果的である．というよりも不可欠であると云った方が良いのかも知れない．私自信の経験からしても，導電性高分子や強誘電性液晶の研究を始めた頃，世の中に物質が存在せず手に入らないのであるから最初は素人ながら自ら合成して研究を進めていたのであるが，ある段階になって化学屋の協力が得られる様になると．一挙に大幅な研究の進展を見た事がある．化学屋の方にとっても同時に大きなプラスになったと云ってもらって嬉しかった事がある．

ザキドフさんと話していてもう一つ当然のことではあるが重要な点を思い出した．

「吉野先生，ここはいい．阪大は素晴らしい．何と云っても学生さんがいい．協力的であるし積極的でよく研究をやる．ディスカッションしていてもとても楽しい．」

私のグループの学生さん皆んなが英語に堪能で流暢な会話をやってるとは思わないが，不思議な事に武道系のスポーツマンが多く，しかも精力的であり，人間的にも素晴らしい学生さんが多いのである．

「研究がとてもやり易いし，楽しい．毎晩十二時頃帰るんだけれど，いつも誰か学生さんが遅くまで研究をやっていて一緒に最終電車に乗って帰る．分子科学研究所も研究設備も素晴らしいし，宿舎もいいし，町の雰囲気もいいし，最高の研究環境だけれども，残念なのはたゞひとつ，学生さんが少ない事です．」

ザキドフさんに指摘されるまでもなく若い学生さんを含めて，豊かな経験を持った大先生から，三十～四十歳代の油ののりきった精力的な研究者等異なる年齢層のものが一緒に研究をやるというのも極めて重要な事と思う．国際，学際に対して歳際とでも云えるかも知れない．

毎日毎日研究に明け暮れている様に見えるザキドフさんではあるが，どうもそれを苦にしていない所から見ると，研究を大いに楽しんでいる節がある．表情から見ても間違いない．学問研究は脇見をしながら楽しくやるべきだという私の主張と一致する．国際交流も脇見をしながら楽しくやるのが一番と思う．

それにしてもこんなずば抜けたザキドフさんの様な，あるいはもっとすごい研究者，学者が旧ソ連からはどんどん流出している様である．これらの人々を日本はもっともっと受け入れる必要がある．旧ソ連邦の国々の人のためにも，日本のためにも．米国以上の受け入れ態勢ができていないのが残念至極である．それにもっと基本的な事を云うと，日本も帰化をもっと容易に適正に行う必要がある様な気がしてならない．

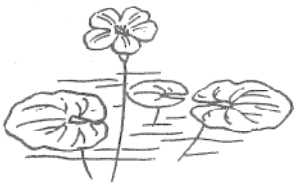
十年前，ソ連邦が解体し瞬く間にこんな状態になると予想していた人がどれだけいただろう．国を引っ張っていくリーダーがいかに大事かという事であり，これを間違うと取り返しがつかない事になるという事である．中国ももともと共産圏であるが今の政治体制を見ると極めて興味深い．中国の首脳部には，何と，極めて多数の工科系の人が入っている．入っているというよりも要職を抑えていると云って良い．代表が国家主席でもある江沢民氏である．彼は上海交通大学の電機科を卒業した筈であるし，政治局で重要な常務委員の殆どがそうである．例えば首相の李鵬氏も電機，電力出身であるし，副首相の朱鎔基氏も電機，彼は清華大学を出ているという話しである．もっともこれは少し前に聞いた話しなので，朱氏が今も同じ立場かどうか知らない．そのほか，こんな最上層部ではないが人民大会に出席する様な幹部の中に私の良く知っている王佛松教授．姚熹教授等がいる事からしても，いかに多くの工科系の人物が中国をひっぱっているかがわかろうと云うものである．

振り返って日本の政府，政治家を見て，一体何人工科系の人間がいるか数えて見たら面白い．中国の様であるのが良いと云うわけではないが．別の面から考え見ても興味深い．現在五十歳前後の人を中心に四十から六十歳位の範囲の年齢の人が高校生であった当時，卒業生が大学のどの分野に進んだかを見てみる必要がある．工科系に圧倒的に成績優秀な人が集中していたと思われる．少なくとも私のいた高等学校では成績上位者の恐らく七割位が工科系に進んだのではないかと思っている．世の中の流れがそんな雰囲気だったのである．なにも成績上位者が日本のリーダーにふさわしいという訳でなく，全く逆のケースもしばしばあるが，少なくともある程度の割り合で政府上層部にいて当たり前の筈である．日本の国土，資源，世界の中に置かれている立場から見て，当分の間，日本は工業重点でいかざるを得ない筈であり，そうでなければ一億二，三千万の人間が生きていける訳がない．こんな事は極めて明瞭であるのに，ある程度成熟した様に見る社会状況に一度なったものだから理工系離れが進み始めている．こんな時に理工系の授業料値上げを云い出す人間の気が知れない．頭を疑う．同じ様に今，大学は世間の批判にさらされながら，大学院重点化を含めていわゆる大学改革が進められつつあるが，その動きかけている方向に気になる事が多い．

何を云っているのかだんだん焦点がぼやけて脱線し始めてしまったが，一つは要は国際交流を有効に進めるために，それなりの宿舎や保険を始めとする，来日する研究者とその家族の生活基盤を支える施設，システムを早急に整える必要があるという事である．国の予算に限界があるとすれば，大学教官にもっと自由度を与えればいい．各人がそれなりのユニークな発想で様々な解決策が出てくるかも知れない．大学に

関しても許認可行政の制約のもとにあり，教官の自由度もかなりの制限下にあるが，日本の将来のために再検討してみたが良い様にも思える．米国のある大学教授は学外に会社を設立しており，会社での成果，資金が大学での研究，教育に生かされている様である．日本に来ているある中国人の親友のお父さんは中国で有名な大学の教授であるが，最近では大学の外に出て企業でもいろいろ活動をしているそうである．それで得た資金は大学での自らの研究に利用されるだけでなく，なんと大学にある額だけ納入義務があるそうである．納入できなければ大学教官の地位が保てないのかも知れない．何と，ここで話題に出したザキドフさんもタシケントでニューシルクロードなる会社を設立したそうである．文化，科学，人物の国際交流を推進する目的だそうであるが，重要な目標の一つに日本があるようである．かってのシルクロードの再現という事だろうが，彼の企みに乗って一度気軽に行ってみたい様な気もする．意外にも，突拍子もない新しいアイデアが生まれるかも知れない．私の持論の脱常識という事からしても日本人としての私の常識を越えた見聞，体験ができるかも知れない．

常識を越えたザキドフさんと接しているうちに，もともと脱常識の私が益々ひどくなって非常識化し，国際交流の話しをしようとしながらどんどんひどい暴言を始めそうになってきたので，この辺で，新大阪駅にも到着する事だし筆を置く事とする．

筆を置いたつもりがもう一つ云い忘れていたので追記．国際，学際．歳際が大事という事のほかに，男女の比率の事があった．一部の例外を除いて大学の工学部，産業界では余りに男性と女性の人数がアンバランスである．これが様々な問題の原因になっている事もある．確かに従来女性が少なかった所に女性が進出した時，いろんな新しい問題も発生もしようが，少なくとももっともっと女性も工科系にすすんで欲しいものである．なにもうるおいがでてくるだけでなく，新しい視点で物が見られるかも知れない．もっともこんな事を云っている私の子供は三人とも娘である．

1) 吉野勝美；雑音・雑念・雑言録（信山社，1993）
2) 国府田隆夫，A．A．Zakhidov；固体物理 27 (1992) 389